

〔研究ノート〕

20世紀前半における名古屋と中東¹⁾との関係*

吉田 達 矢

名古屋学院大学国際文化学部

要 旨

本稿は、20世紀前半における名古屋市および名古屋市の人々と中東各国・地域との関係について考察した。まず、当時の名古屋市の人々が中東出身者を見る機会は少なかった。また、名古屋市における中東に関する啓蒙活動は、大日本回教協会（昭和13年設立）の協力があって昭和15年以降、2回ほど行われたにすぎない。ただし、実業家たちは大正末頃から中東に関心を持ち始め、恐慌の一時期を除いて、太平洋戦争が始まる直前まで貿易先として中東には関心を持ち続けていた。その背景には、名古屋商工会議所と大日本回教協会の積極的な活動があった。ただし、実際には中東からの輸入が行われた時期は短く、いずれの国や地域からの輸入品の量もごく僅かであった。

キーワード：20世紀前半，名古屋市，中東，名古屋商工会議所，大日本回教協会

The Relationship between Nagoya and the Middle East in the First Half of the Twentieth Century

Tatsuya YOSHIDA

Faculty of Intercultural Studies
Nagoya Gakuin University

* 本稿は、公益財団法人シキシマ学術・文化振興財団第29回研究助成金（研究課題：「戦前期の名古屋市におけるイスラーム教徒に関する研究—タタール人コミュニティの動向を中心として—」）による研究成果の一部である。

発行日 2016年7月31日

1. はじめに

名古屋市は明治から昭和初めにかけて「商工業都市」²⁾として発展した。一方、同時期の名古屋市の国際性については、明治20(1887)年ころまでは来名した外国人は僅かであったが、明治20年代以降は宗教関係の外国人が訪れるようになり、明治40(1907)年末には65人の外国人が名古屋に在住していた³⁾。そして、明治41(1908)年には名古屋港が開港し⁴⁾、以降何度か拡張工事が行われて、昭和恐慌期を除き、貿易量は着実に増加していった。その後、各国の領事館も開設されていった⁵⁾。昭和12(1937)年には名古屋汎太平洋平和展覧会が開催されている⁶⁾。このように、戦前の名古屋市は国際性を帯びていたと言えることができ、一時的にせよ長期にせよ名古屋市に滞在したロシア人、ドイツ人、タタール人に関する研究は近年すすんでいる⁷⁾。ただし、名古屋市および名古屋市の人々と諸外国・地域との具体的な関係については、あまり研究がみられない⁸⁾。

そこで、本稿では、戦前期の名古屋市の国際性を明らかにするための事例のひとつとして、20世紀に入ってから太平洋戦争が勃発するまでの名古屋と中東との関係を明らかにすることを目的とする。具体的には、名古屋市および名古屋市の人々は、いつからどのような関係を中東と持つようになったのか、という問題を検討する。ちなみに、『名古屋港における対中近東貿易』という冊子⁹⁾では、昭和45(1970)年以前については全く言及されていない。

本稿における考察の対象となるのは、アフガニスタン、アデン、アラビア、イラク、イラン、シリア、トルコ、パレスチナ(パレンスタイン)、バーレーン諸島、とする¹⁰⁾。なお、本稿では、人名などの固有名詞、書名や商品名以外の旧字体や当時の仮名遣いは現代風に改めた。また、年号については、本文のみ初出時には元号と西暦を併記するが、以降は元号のみ表記する。

2. 名古屋市における中東

2.1 中東出身者の来名

『名古屋市統計書』や『外事警察概況』をみるかぎり、戦前の名古屋市において中東出身者が居住していた形跡はほとんどみられない¹¹⁾。このため、名古屋市の人々が中東出身者と日常的に接していた可能性は低い。ただし、名古屋市の人々が中東出身者と出会う機会が全くなかったわけではない。

たとえば、昭和12年1月22日に行われた名古屋モスクの落成式には、トルコ、イラン、アラブのムスリム(イスラーム教徒)が参加したようである¹²⁾。また、昭和14(1939)年11・12月に東京と大阪で開催された回教圏展覧会を契機として、同年11月24～25日には回教徒視察団が名古屋を訪問している。この視察団のなかにはイエメン人がいた¹³⁾。視察団一行のスケジュールとしては、11月24日午後6時に名古屋駅到着、その後、愛知県・名古屋市・名古屋商工会議所共同主催の晩餐会が催され、観光ホテルに宿泊した。翌25日は愛知県庁、名古屋市庁を訪問、名古屋城見物、名古屋松坂屋訪問、松坂屋主催午餐会、東山動物園見物、回教礼拝堂(=名古屋

モスク)参拝,午後6時20分名古屋駅を出立した¹⁴⁾。また昭和16(1941)年4月には,アフガニスタン経済使節団が名古屋を訪れている¹⁵⁾。

このように,名古屋モスクの落成式,回教徒視察団やアフガニスタン経済使節団の来名などの際には,名古屋の人々が中東出身者を目の当たりにした可能性はあるだろう。

2.2 啓蒙活動

明治以来昭和初期までの,一般の小中学生の中東やイスラームに関する知識は極めて限られていた¹⁶⁾。ただし,多数の文献を通じて名古屋市の人々は中東に関する知識を得ていたと思われる。

大正13(1924)年11月21日には,志賀重昂が世界踏査実施幻灯会を,中区白川小学校講堂において開催した¹⁷⁾。志賀は同年2~3月にかけて中東を調査旅行したので¹⁸⁾,この時にも中東に関して話をしたと思われる。この後,名古屋市において中東に関連する啓蒙的なイベントは十数年みられない。

昭和15(1940)年4月4~11日には松坂屋7階ホールにおいて,愛知県・名古屋市・大日本回教協会・東京イスラム教団主催で回教圏展覧会が開催された¹⁹⁾。昭和16年6月12日には,大日本回教協会主催で新愛知新聞社講堂において,西南アジア事情講演会として,隈部種樹前イラク公使,中山詳一前イラン公使,横山正幸前エジプト公使,林銑十郎大日本回教協会初代会長による講演などがあり,聴衆は1200人にも達した²⁰⁾。昭和17(1942)年1月20~25日にかけては,名古屋新聞主催で名古屋市十一屋百貨店において磯田蓉工のイラン脱出行絵書展が開催された²¹⁾。

2.3 実業家たちの中東への関心

トルコとの貿易は遅くとも大正11(1922)年には始まっているが(後述),名古屋市の実業家たちが本格的に中東に関心を持つようになったのは,大正時代の終わり以降と思われる。その発端といえるのが,大正14(1925)年6月11日付で駐トルコ大使に親任された小幡西吉の名古屋訪問である。小幡はトルコへの出発前(同年6~9月のあいだ?)に名古屋商工会議所の人々と会見し,中東諸国との経済発展の抱負を話して協力を求めた。それに対して,彼らは小幡を評価し,商品見本を彼に託した²²⁾。また,同時期の『名古屋商工会議所月報』では,「輸出好望の天地メソポタミヤ:イラック王国の経済状態に就て」(216号(大正14年7月)),「欧羅巴事情の或る一端と近東方面旅行の所感」((上):226号(大正15(1926)年5月),(下):228号(大正15年7月))²³⁾などが掲載されている。以上のように,大正末期には名古屋の実業家たちのあいだで中東に対する関心が高まっていたといえる。

ところが,昭和に入るとすぐに,金融恐慌(昭和2(1927)年3月)や昭和恐慌(昭和5~6(1930~31)年)が起こった。そのような苦しい状況下でも,昭和6年11月28日には名古屋商工会議所が,大阪丸松メリヤス合名会社久保田営業部長と大阪青木嵩山堂専務取締役を招き,「シリヤ,パレンスタイン,バルカン,埃及方面に就ての講演映画会」を行っている²⁴⁾。

昭和恐慌から回復しつつあった昭和8(1933)年2月には,名古屋市斡旋のもと,輸出増進を

目的として名古屋新販路輸出協会が組織された。それは、中南米、バルカン、アフリカなどへの新販路の開拓をめざしたものであった。名古屋市と名古屋市の実業家たちは、これ以降も一体となって輸出振興を掲げ、販路の拡大をめざした²⁵⁾。昭和10(1935)年には名古屋市が「近東埃及地方」に海外市場調査員3名(島貫武雄、水野萬作、松井賢次郎)を派遣している²⁶⁾。同年7月12～16日にかけては、近東貿易協会²⁷⁾本部と同協会愛知支部の主催で愛知県商品陳列所(中区新栄町)において、近東事情展覧会が催された²⁸⁾。また、同年9月から翌年4月にかけて、名古屋陶磁器輸出組合主事であった島貫武雄が近東埃及調査員として、イラン、イラク、シリア、トルコ、パレスチナなどを訪問している²⁹⁾。昭和11(1936)年1月には、「名古屋近東アフリカ雑貨輸出組合」が結成された³⁰⁾。昭和12年9月24日には、愛知県商工館本館において近東経済事情講演会が開催されている³¹⁾。昭和13(1938)年には「名古屋近東アフリカ輸出組合」が結成された³²⁾。昭和14年3月22日には、名古屋市において、大日本回教協会会長主催の晩餐会が催された。そこには名古屋市の有力者30余名が招待され、協会事業への協力が求められた³³⁾。同年11月24日には、来名した回教徒視察団のための晩餐会が、大日本回教協会と名古屋商工会議所の共同主催で名古屋商工会議所において、翌25日には松坂屋主催で午餐会が松坂屋で催されている³⁴⁾。上述の回教圏展覧会期間中の昭和15年4月6日午前11時～午後3時半には、松坂屋六階社交室にて、回教圏貿易座談会も行われている³⁵⁾。昭和16年6月11日には、愛知県、名古屋市、名古屋商工会議所共同主催のもとで、同会議所において、上述の西南アジア事情講演会の諸氏と名古屋市官民有力者との座談会も催された³⁶⁾。

なお、日土協会³⁷⁾に、名古屋商工会議所会頭(1回目:昭和11年12月～昭和15年10月)であった青木鎌太郎や、日本アンゴラ産業株式會社事務取締役の伊藤勝次(のちに児玉利武)が入会している³⁸⁾。

3. 中東の物産

本章では、中東からの輸入について検討する³⁹⁾。この時代の中東との貿易に関しては、常に輸出超過であり、同時代の輸出状況については別稿にてすでに考察した⁴⁰⁾。その概要を述べると、名古屋港から中東への輸出は昭和9(1934)年に本格化し、昭和10年に輸出量はピークに達した。主な輸出品は綿織物であった。昭和15年以降は、輸出も輸入も殆どみられなくなった。なお、本稿の考察対象の時期には、アフガニスタンとバーレーン諸島からの輸入はなかったため、割愛した。

3.1 アデン

昭和7(1932)年に1000円以下で輸入がなされているが、具体的なことは不明である。その後は、僅かに昭和14年に小包郵便物1円だけがあった。

3.2 アラビア

昭和10年に1000円以下で輸入がなされているが、具体的なことは不明である。その後は、昭和13年に小包郵便物1円だけがあった。

3.3 イラク

昭和9年には1000円以下で輸入がなされているが、具体的なことは不明である。昭和10年は輸入はなかったようである。昭和11年の輸入額は1万9691円だったが、この年も詳細は不明である。昭和12～14年の輸入額はそれぞれ、39万5652円（昭和12年）、11万5102円（昭和13年）、2万3645円（昭和14年）であった（表1～3参照）。表1～3からは、主な輸入品として、小麦、高粱（モロコシの一種）、胡麻子であったことがうかがえる。

3.4 イラン

『名古屋港貿易発展三十年史』では、イランとの貿易が「其他アジア」から分離して単独で統計されるようになったのは昭和10年からである。同年の輸入額は1万3146円であった。昭和11年は2万7931円、昭和12年は小包郵便物4円だけであった。昭和13年の輸入総額は1万6301円で、内訳は「其他ノ護謨及樹脂」が1万5368円（総額に占める割合は約94.2%）、「再輸入品」が933円（同約5.8%）であった。昭和14年は、小包郵便物9円、旅客携帯品6053円であった。

3.5 シリア

『名古屋港貿易発展三十年史』では、シリアからの輸入は昭和9年から統計記録がある。昭和9年は1000円未満、昭和10年は10円、昭和11年は45円であった。各年の具体的な輸入品については不明である。昭和12年は再輸入品390円のみであった。昭和13・14年はそれぞれ小包郵便物1円、小包郵便物2円だけであった。

3.6 トルコ

大正11年には1000円分の輸入があった。しかし、その後の大正12（1923）～昭和4（1929）年のあいだには輸入はなかったようである。昭和5（1930）～9年はいずれの年も輸入額は1000円未満であり、昭和10年は32円であった。昭和11年は1万7554円であったが、昭和12年は小包郵便物9円だけであった。昭和13年は11万1270円で、内訳は塩7万8535円（総額に占める割合は約70.6%）、山羊毛3万1990円（同約28.7%）、再輸入品745円（同約0.7%）であった。昭和14年には輸入はなかったようである。

3.7 パレスチナ

昭和9・10年の輸入額はいずれも1000円未満であった。昭和12～14年はいずれも小包郵便物だけであり、それぞれ1円（昭和12年）、5円（昭和13年）、1円（昭和14年）であった。

4. おわりに

20世紀前半における名古屋市および名古屋市の人々と中東との関係を検討した結果、当時の名古屋市の人々が中東を実感する機会は殆どなかったといえる。一般向けの中東に関するイベントは、昭和13年に設立された大日本回教協会の協力によって行われるようになり、昭和15年4月の回教圏展覧会と昭和16年6月の西南アジア事情講演会が開催されたが、その後は太平洋戦争が始まったことにより、活動はほとんど停滞してしまった。

一方で、実業家たちは大正末にはトルコを中心に中東に関心を持ち始めた。恐慌が起こると一時的に停滞するが、恐慌から回復しつつあった昭和8年以降、太平洋戦争が始まる昭和16年12月直前ころまで、貿易相手として中東には関心を持ち続けていた。その背景には、名古屋商工会議所や大日本回教協会の積極的な活動があったといえる。ただし、実業家たちはあくまで商品の輸出先として中東をみていた。実際、中東からの輸入は、トルコを除いて行われた時期は短く、トルコを含めたいずれの国や地域からの輸入品の量もごく僅かであった。

註

- 1) 現在の中東地域を表す言葉として、当時は「近東」が使われていたが、本稿では中東を用いる。
- 2) <http://www.city.nagoya.jp/shiminkeizai/page/0000001750.html> (2016年4月28日閲覧)
- 3) 芥子川律治「外国関係概説」名古屋市教育委員会『写真図説名古屋の史跡と文化財』, 泰文堂, 1970年, pp. 120-121。
- 4) 名古屋港の建設過程と当初の貿易については、新修名古屋市史編集委員会(編)『新修名古屋市史』, 第5巻, 名古屋市, 2000年, pp. 412-424を参照。
- 5) 大正8(1919)年にはアメリカ領事館, 大正10(1921)年にはポルトガル名誉副領事館, 大正14年にはオランダ名誉副領事館, 昭和3(1928)年にはアルゼンチン名誉副領事館, 昭和7年には中華民国神戸総領事館名古屋弁事処, 昭和10年にはシャム国(タイ)名誉領事館が開設された(名古屋市役所『大正昭和名古屋市史』, 第四巻(商業編(下)), 名古屋市, 1954年, pp. 266-269。)
- 6) 名古屋汎太平洋平和展覧会については、『新修名古屋市史』, 第6巻, 2000年, pp. 611-616;西尾林太郎「国際博覧会としての名古屋汎太平洋平和博覧会—その光と影—」『雲雀野:豊橋技術科学大学人文科学系紀要』23(2001), pp. 49-60;中田平「名古屋汎太平洋平和博覧会の背景」『金城学院大学論集, 人文科学編』1(2004), pp. 141-158などを参照。
- 7) ロシア人捕虜に関しては、堀田慎一郎「日露戦争のロシア軍捕虜と愛知県—名古屋を中心に—」『愛知県史研究』第8号(2004), pp. 1-15。第一次世界大戦のドイツ人捕虜に関しては、『新修名古屋市史』, 第6巻, pp. 92-97;校條善夫「青島戦ドイツ兵俘虜と名古屋の産業発展—技術移転の様相を探る—」『産業遺産研究』15(2008), pp. 19-36;岸本肇「名古屋俘虜収容所ドイツ兵捕虜のスポーツ活動とその特徴」『スポーツ史研究』22(2009), pp. 13-19などがある。タタール人に関しては、重親知左子「松坂屋回教圏展覧会の周辺」『大阪大学言語文化学』12(2003), pp. 179-191;拙稿「戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相:人口推移と就業状況を中心に」『名古屋学院大学論集:言語・文化篇』24-2(2013), pp. 281-291;同「戦前期の名古屋におけるタタール人の諸相(2):名古屋回教徒団とイデル・ウラル・トルコ・

20世紀前半における名古屋と中東との関係

- タタール文化協会名古屋支部の活動を中心に」『名古屋学院大学論集：人文・自然科学篇』50-1（2013），pp. 15-34；同「戦前期における在名古屋タタール人の交流関係に関する一考察」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』48（2014），pp. 160(247)-149(258)などを参照。
- 8) アフリカとの関係については、以下の論考がある。青木澄夫「昭和前半期における名古屋経済人のアフリカへの関心—名古屋商工会議所の活動を中心に—」『アリーナ』4（2007），pp. 152-180。
 - 9) 名古屋税関『名古屋港における対中近東貿易』，名古屋税関，1977年。
 - 10) アフガニスタンは、大正8年にイギリスから独立し、昭和3年には日本との国交開始に関する日本アフガニスタン修好基本条約を調印した。日本とアフガニスタンの関係史に関しては、前田耕作（監修）・関根正男（編）『日本・アフガニスタン関係全史』，明石書店，2006年を参照。また、当時のアデン、アラビア、イラク、イラン、シリア、トルコ、パレスチナ、バーレーン諸島については、拙稿「昭和前半期における名古屋港から中東への輸出」『名古屋学院大学論集：社会科学篇』52-4（2016），pp. 218-219の註5～12を参照。
 - 11) 内務省警保局（編）『外事警察概況』，第6巻（昭和15年），不二出版，1987年に付録として所収されている「内地居住外国人国籍別人員表」によれば、昭和15年12月時点で愛知県にトルコ（土耳其）国籍の2人（男1人，女1人）が居住していた。また大正14～昭和13年度までの『名古屋市統計書』では、僅かに昭和6（1931）年にトルコ人が5人（うち女性2人）在留していたのみであった。『名古屋市統計書』のなかで「その他」に分類された者たちのなかに中東出身者がいた可能性はあるが、居住していたとしてもその数はごく僅かであったと思われる。
 - 12) たとえば、Larisa USMANOVA. *The Türk-Tatar Diaspora in Northeast Asia*, Tokyo: Rakudasha, 2007, p. 105. また、タタール語新聞『ミッリー・バイラク（Milli Bayrak）』63（1937年2月21日発行），p. 6でも、アラブのムスリムが参加していたことがうかがえる。一方、『新愛知』16319；『名古屋新聞』14686；『大阪朝日新聞』19846（3紙とも1937年1月23日発行）では、中東出身者が参加したとは記されていない。
 - 13) 『記録 回教圏展覧會：全世界回教徒第一次大會來朝回教徒視察團』，大日本回教協會，1940年（以下、『回教圏展覧會』），p. 3では、「回教圏展覧會來朝代表者」としてイエメンの宗教大臣アル・キブシーとその従者ハツヂ・ホセインの名がみられる。
 - 14) 『回教圏展覧會』，pp. 24, 98-99。
 - 15) 『回教世界』第三巻五月号（1941年5月），p. 107。
 - 16) 羽田正『イスラーム世界の創造』，東京大学出版会，2005年，p. 227。
 - 17) 服部鉦太郎『写真図説 大正の名古屋』，泰文堂，1980年，p. 349。
 - 18) この調査旅行に関しては、志賀重昂『知られざる国々』，地理調査会，1926年（志賀重昂全集刊行会（編）『志賀重昂全集』，第6巻，志賀重昂全集刊行会，1928年，pp. 327-439）。また、田中克己「回教圏と志賀重昂」『回教圏』第五巻第一号（1941年1月），pp. 43-49も参照。
 - 19) 重親「松坂屋回教圏展覧會」，p. 180。
 - 20) 『外事警察概況』，第7巻（昭和16年），p. 387。
 - 21) JACAR（アジア歴史資料センター），Ref.B04012271300，本邦美術展覧會関係雑件12. イラン脱出行絵画展（外務省外交史料館）。
 - 22) 小幡西吉伝記刊行会（編著）『小幡西吉』，小幡西吉伝記刊行会，1957年，p. 354。なお、大正15年4月26日～同年5月5日にかけて、トルコのイスタンブルにおいて近東貿易會議が開催されている。近東貿易會議については、池井優「一九二六年近東貿易會議—日本・トルコ関係史の一断面—」池井優・坂本勉（編）『近代日本とトルコ世界』，勁草書房，1999年，pp. 131-153を参照。
 - 23) いずれも、大正15年2月20日に開催された名古屋商工会議所主催の貿易懇談会における、ロンドン駐在

松山商務書記官による講演の速記記録である。

- 24) 名古屋商工会議所（編）『名古屋商工会議所五十年史』，名古屋商工会議所，1941年，p. 679。
- 25) 『新修名古屋市史』，第6巻，p. 576。
- 26) 中川貞三（編）『近東埃及市場調査』，名古屋新販路輸出協会，1937年。
- 27) 日土貿易協会が昭和7年6月1日付で名称を変更した。JACAR，Ref.B08061572500，本邦商工会議所並経済団体関係雑件，第二巻（外務省外交史料館）。
- 28) JACAR，Ref.B08061724500，本邦展覧会関係雑件，第二巻（外務省外交史料館）。この展覧会には，日土協会会員各氏（山田寅次郎・内田定槌・小林元・大久保幸次）が「近東諸国に関する参考品其他」を出陳している（『日土協会會報』十八号（1935年11月30日発行），pp. 75-76）。なお，『日土協会會報』については，三沢伸生（監修）『日土協会『日土協会會報』』（CD-ROM版，Ver. 1），東洋大学アジア文化研究所，2009年を利用した。
- 29) 島貫武雄（報告）・名古屋陶磁器輸出組合（編）『近東諸國陶磁器市場調査』（海外陶磁器市場調査第六輯），名古屋陶磁器輸出組合，1936年。
- 30) 「近東アフリカの新市場開拓に拍車：名古屋に新しい輸出組合：日本品，世界制覇へ」『中外商業新報』1936年1月17日号。
- 31) 講演要旨として，『最近の近東経済事情』（貿易叢書第二編），愛知県商工館・近東貿易協会愛知支部，1937年。講演者と講演タイトルは，外山一青（イスタンブル日本商品館主事）「最近の近東経済事情」，松井勳（近東貿易協会専務理事）「近東の重要性と本會の使命」であった。
- 32) 『新修名古屋市史』，第6巻，p. 670。
- 33) 「大日本回教協会業務報告」『回教世界』第一巻第五号（1939年8月），p. 102。
- 34) 『回教圏展覧會』，pp. 24, 99。晩餐会には，山内県総務部長，佐藤・三樹両市助役，高松会議所副会頭など約50名が出席した（『新愛知』1939年11月25日朝刊，p. 5（市内版））。
- 35) 「回教圏貿易座談會」『回教世界』第二巻第六号（1940年6月），pp. 37-61。出席者は次のとおりであった（括弧内は当時の職名・肩書）。安積得也（愛知県経済部長），阿部萬平（愛三商船社長），大島宗子郎（外務省通商局外務技師），尾崎哲次郎（田代商店常務），刈田貞一郎（名古屋松坂屋宣傳部長），加藤勝太郎（名古屋商工会議所貿易部長），木村茂（大阪毎日新聞名古屋總局経済部長），熊谷勝（商工省貿易局事務官），笹山真一（名古屋印度雜貨輸出組合・中部日本南洋雜貨輸出組合），鈴木四郎（名古屋松坂屋計畫主任），堤章（四王天國際事情研究所理事長），土屋富五郎（實業家），山本直一（豊田自動車株式会社），中川貞三（名古屋市産業部長），根井三郎（外務省歐亞局書記官），原博嗣（名古屋商工会議所），藤井覺猛（大阪毎日新聞名古屋總局社會部長），松永秀則（名古屋市會議員），三樹樹三（名古屋市助役），持田賢士（大阪毎日新聞名古屋總局長），本永實一（東洋棉花株式会社支店長），山田勝庸（陸軍少將），花岡止郎（大日本回教協會理事），原田十兵衛（大日本回教協會職員），神田三三（同），宮元秀雄（同）。
- 36) 『回教世界』第三巻七月号（1941年7月），p. 121。
- 37) 大正15年6月15日に東京において，「日本及び土耳其兩國国民の親善を図り相互の福利を増進すること」（規約第二条）を目的として設立された。
- 38) 青木鎌太郎の入会は『日土協会會報』第21号（1937年8月28日発行），伊藤勝次の入会は同第23号（1939年10月15日発行），児玉利武の入会は同第24号（1940年3月31日発行）に記されている。
- 39) 昭和11年以前に関しては，名古屋商工会議所統計課（編）『名古屋港貿易發展三十年史：自明治四十年至昭和十一年』，名古屋商工会議所統計課，1937年。昭和12～14年に関しては，名古屋商工会議所（編）『名古屋商工会議所外國貿易年報：昭和十二年』，名古屋商工会議所，1938年；同『名古屋商工会議所外國貿易年報：昭和十三年』，名古屋商工会議所，1939年；同『名古屋商工会議所外國貿易年報：昭和十四

20世紀前半における名古屋と中東との関係

年』、名古屋商工会議所、1940年、を参照した。なお、本文や各表の「総額に占める割合」では、小数点2桁目を四捨五入した。たとえば、10.14%の場合は10.1%、10.15%の場合は10.2%とした。

40) 拙稿「昭和前半期における名古屋港から中東への輸出」, pp. 209-234。

表1 イラクからの輸入品（昭和12年）

	品名	単位	数量	金額（円）	総額に占める割合（%）
1	小麦Wheat	百斤	19773	155677	39.3
2	黍“Kibi”	同	6318	33059	8.3
3	高粱“Kao-liang”	同	33972	169665	42.9
4	玉蜀黍Maize	同	1712	9495	2.4
5	小包郵便物Parcel post			15	0.1未満
6	其他Other			27741	7.0
総額				395652	

表2 イラクからの輸入品（昭和13年）

	品名	単位	数量	金額（円）	総額に占める割合（%）
1	小麦	百斤	2817	21615	18.8
2	高粱	同	4429	22518	19.6
3	胡麻子	同	4483	69077	60.0
4	小包郵便物			75	0.1未満
5	再輸入品			1591	1.4
6	其他			226	0.2
総額				115102	

表3 イラクからの輸入品（昭和14年）

	品名	単位	数量	金額（円）	総額に占める割合（%）
1	胡麻子	百斤	800	11820	50
2	小包郵便物			6	0.1未満
3	其他			11819	50
総額				23645	



図 第一次世界大戦後の中東

出典：宮崎正勝『早わかり中東&イスラーム世界史』，日本実業出版社，2006年，p.213。